

九州における素材の交流

福岡県林業試験場 福島 敏彦

1. 目的および方法

九州と九州域外との素材の交流；九州内における素材の交流について現状を分析し、今後の素材交流の方向を示す。方法は「木材需給報告書」（農林省統計情報部）の資料をもとに、昭和50年から昭和57年の8か年の素材総数を中心に時系列的に分析した。

2. 結果および考察

図-1は外材と国産材の入荷割合を示した。全体の傾向としてはわずかに外材の割合が減少するが、沖縄・佐賀・福岡は外材率が75%以上と高く、逆に、宮崎・熊本・鹿児島は30%以下で低い。大分・長崎は両地域の中間的な外材率となる。このことから、外材との競争度合は大きく3つの型に分けられる。図-2は各県産材の中で製材用の割合を示したものである。佐賀を除くと製材用率が高くなる傾向がある。人工林率の高い大分・福岡・佐賀・熊本の製材用率が高く80%前後である。地域的には福岡を中心とした地域の製材用率が高い。他の県は平均を下回った製材用率になる。拡大造林地の多くは製材用素材を目的としていることから、今後の供給増加率を上回った製材用率の伸びが予測される。従って、製材用の競争度合は強まると推察

される。図-3は九州各県と九州外との素材の交流を示したものである。地域間のパイプの大きさは出荷量、破線は8か年に出荷がなかったことを示している。九州における年生長量は総需要の約1.5倍であるから、相当量の九州外移出が必要となってくる。九州外移出パイプは福岡・大分・宮崎が大きく、今後の役割は大きくなる。年生長量が県内総需要より少ない県は福岡のみであるが、福岡への出荷は大分・熊本が多い。大分は福岡への出荷に次いで、九州外・熊本・宮崎の順に出荷量が多い。宮崎は熊本・鹿児島への出荷が多いが、鹿児島からの入荷も多く、両地域間のパイプは大きい。鹿児島は熊本への出荷パイプが大きく、入荷の2倍程度である。鹿児島と大分・長崎間の入荷はない。長崎は入出荷ともに少ない。佐賀は入荷量が少なく、福岡、長崎への出荷が若干ある。図-4は県外移出量の推移を示した。素材の県外移出は減少する傾向にある。特に鹿児島は1978年から急に県外移出が減少した。図-5は生産量と県外移出との関係を示したもので、生産量が増加すると移出量も増加する。近年の生産量は減少していることから、県外移出量も少なく、図-4の時系列的減少化傾向も生産量と密接な関係があるものと推察されるが、産地化との関係もあり、製品の交流についても分析する必要がある。

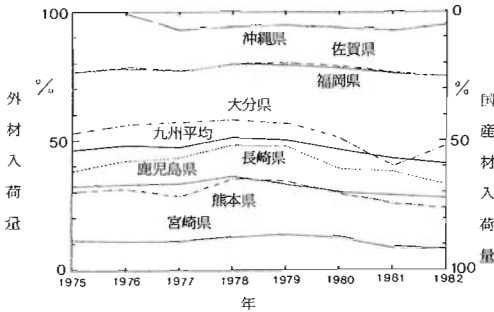


図-1. 外材・国産材入荷割合の推移

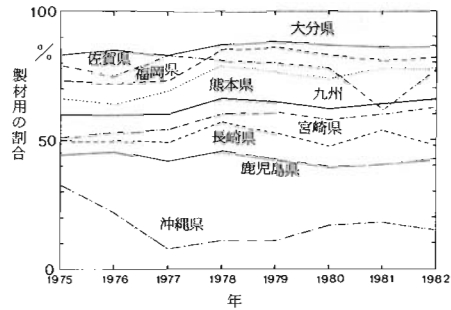


図-2. 国産素材生産量に対する製材用割合の推移

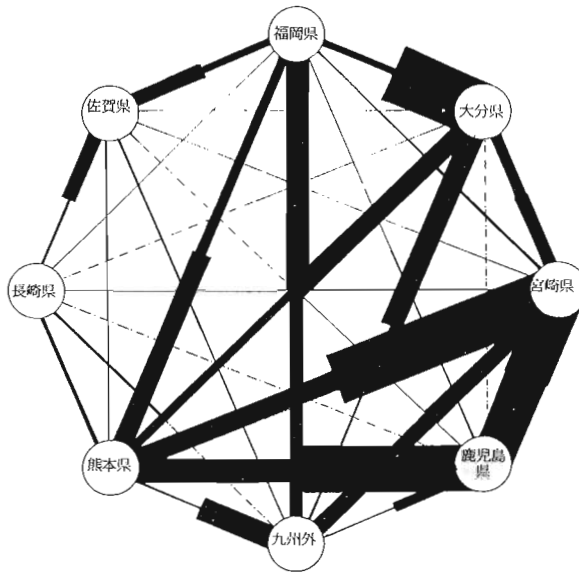


図-3. 素材の交流

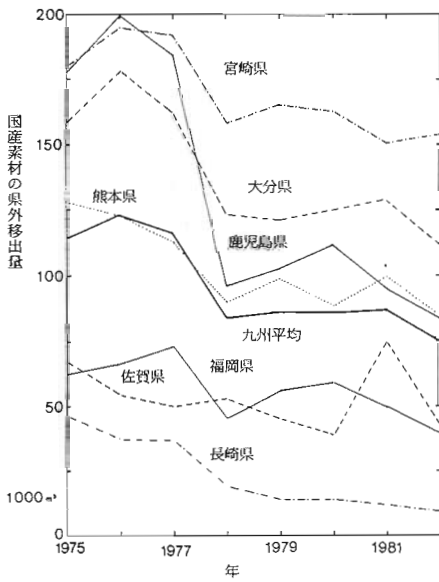


図-4. 県外移出量の推移

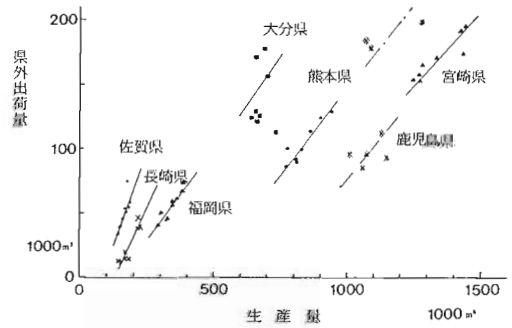


図-5. 国産素材生産量と県外移出との関係